

「万葉集」恋の歌をよむ

群馬県立女子大学 北川 和秀

A. 恋心

①かくばかり恋ひむものそと知らませば遠くも見べくありけるものを

〈二一・二三七二〉柿本人麻呂歌集

②君に恋ひ甚も術なみ奈良山の小松が下に立ち嘆くかも

〈四・五九三三〉笠女郎

③信濃なる筑摩の川の細石も君し踏みてば玉と拾はむ

〈二四・三四〇〇〉東歌（信濃）

④一昨日も昨日も今日も見つれども明日さへ見まく欲しき君かも

〈六・一〇一四〉橘文成

⑤わが背子にわが恋ふらくは夏草の刈り除くれども生ひ及く如し

〈二一・二七六九〉作者不明

⑥恋ひ恋ひて逢へる時だに愛しき言尽してよ長くと思はば

〈四・六六一〉大伴坂上郎女

⑦思はぬに到らば妹が嬉しりと笑まむ眉引き思ほゆるかも

〈二一・二五四六〉作者不明

⑧朝寝髪われは梳らじ愛しき君が手枕触れてしものを

〈二一・二五七八〉作者不明

⑨磯城島の日本の国に人二人ありとし思はば何か嘆かむ

〈二三・三三四九〉作者不明

⑩妹と言はば無礼し恐ししかすがに懸けまく欲しき言にあるかも

〈二二・二九一五〉作者不明

⑪梅の花降り覆ふ雪を包み持ち君に見せむと取れば消につつ

〈二〇・一八三三〉作者不明

B. 母

①たらちねの母に知らえずわが持てる心はよし君がまにまに

〈二一・二五三七〉作者不明

②たらちねの母に障らばいたづらに汝もわれも事成るべしや

〈二一・二五一七〉作者不明

③汝が母に嘖られ吾は行く青雲のいで来吾妹子逢ひ見て行かむ

〈二四・三五一九〉東歌（未勘国）

④たらちねの母に申さな君もわれも逢ふとは無しに年そ経ぬべき

〈二一・二五五七〉作者不明

⑤かくのみし恋ひば死ぬべみたらちねの母にも告げつ止まず通はせ

〈二一・二五七〇〉作者不明

C. 人の目・人の噂

①暫くも見ねば恋しき吾妹子を日に日に来れば言の繁けく

〈二一・二三九七〉柿本人麻呂歌集

②心には燃えて思へどうつせみの人目を繁み妹に逢はぬかも

〈二二・二九三二〉作者不明

③嘆きせば人知りぬべみ山川の激つ心を塞きあへてあるかも

〈七・一三八三〉作者不明

④あしひきの山より出づる月待つと人には言ひて妹待つわれを

〈二二・三〇〇二〉作者不明

⑤ま遠くの野にも逢はなむ心なく里の真中に逢へる背なかも

〈二四・三四六三〉東歌（未勘国）

⑥人言を繁み言痛み己が世に未だ渡らぬ朝川渡る

〈二一・一一六〉但馬皇女

D. 来ない男

①春雨に衣はいたく通らめや七日し降らば七日来じとや

〈二〇・一九一七〉作者不明

②相思はず君はあるらしぬばたまの夢にも見えず祈誓ひて寝れど

〈二一・二五八九〉作者不明

③夕トにも占にも告れる今夜だに来まさぬ君を何時とか待たむ

〈二一・二六一三〉作者不明

E. 夫婦愛

①わが里に大雪降り大原の古りにし里に落らまくは後

〈二一・一〇三三〉天武天皇

②わが岡の霰に言ひて落らしめし雪の摧けし其処に散りけむ

〈二一・一〇四〉藤原五百重娘

③わが背子と二人見ませば幾許かこの降る雪の嬉しからまし

〈八・一六五八〉光明皇后

④君がため手力疲れ織りたる衣ぞ 春さらばいかなる色に摺りてば好けむ

〈七・一二八一〉柿本人麻呂歌集

⑤つぎねふ 山背道を 他夫の 馬より行くに 己夫し 歩より行けば 見ること
に 涙のみし泣かゆ 其思ふに 心し痛し たらちねの 母が形見と わが持て
る 真澄鏡に 蜻蛉領巾 負ひ並め持ちて 馬買へわが背

〈三・三三二四〉作者不明

⑥真澄鏡持てれどわれは験なし君が歩行よりなづみ行く見れば

〈三・三三二六〉作者不明

⑦馬買はば妹歩行ならむよし急やし石は履むとも吾は二人行かむ

〈三・三三二七〉作者不明

F. 生別

①草枕旅行く君を人目多み袖振らずしてあまた悔しも

〈二・三二八四〉作者不明

②蘆垣の隈処に立ちて吾妹子が袖もしほほに泣きしそ思はゆ

〈二・四三三七〉刑部千国／上総防人

③梳も見じ屋中も掃かじ草枕旅行く君を齋ふと思ひて

〈二・四二六三〉作者不明

④君が行く海辺の宿に霧立たば吾が立ち嘆く息と知りませ

〈二・三五八〇〉遣新羅使人の妻

⑤わが妻はいたく恋ひらし飲む水に影さへ見えて世に忘れず

〈二・四三三二〉若倭部身麻呂／遠江防人

⑥吾等旅は旅と思ほど家にして子持ち瘦すらむわが妻かなしも

〈二・四三三三〉玉作部広目／駿河防人

⑦色深く背なが衣は染めましを御坂たばらばま清かに見む

〈二・四四二四〉物部刀自亮／武蔵防人妻

⑧防人に行くは誰が背と問ふ人を見るが羨しさ物思もせず

〈二・四四二五〉防人妻（昔年）

⑨君が行く道のながてを繰り畳ね焼きほろぼさむ天の火もがも

〈二・三七二四〉狭野弟上娘子

⑩畏みと告らずありしをみ越路の手向に立ちて妹が名告りつ

〈二・三七三〇〉中臣宅守

⑪わが背子が帰り来まさむ時の為命残さむ忘れたまふな

〈二・三七七四〉狭野弟上娘子

G. 死別

①降る雪はあはにな降りそ吉隠の猪養の岡の寒からまくに

〈二・二〇三三〉穂積皇子

②悔しかもかく知らませばあをによし国内ことごと見せましものを

〈五・七九七〉山上憶良

③妹が見し棟の花は散りぬべしわが泣く涙いまだ干なくに

〈五・七九八〉山上憶良

④吾妹子が見し鞆の浦のむろの木は常世にあれど見し人そなき

〈三・四四六〉大伴旅人

⑤福のいかなる人か黒髪の白くなるまで妹が声を聞く

〈七・一四一一〉作者不明

⑥我が背子を何処行かめときき竹の背向に寝しく今し悔しも

〈七・一四一一〉作者不明

H. 表現の工夫

①君が目を見まく欲りしてこの二夜千歳の如く吾は恋ふるかも

〈二・二三八一〉柿本人麻呂歌集

②朝影にわが身はなりぬ玉かぎるほのかに見えて去にし子ゆゑに

〈二・二三九四〉柿本人麻呂歌集

③一重のみ妹が結ばむ帯をすら三重結ぶべくわが身はなりぬ

〈四・七四二〉大伴家持

④夏の野の繁みに咲ける姫百合の知らえぬ恋は苦しきものそ

〈八・一五〇〇〉大伴坂上郎女

⑤陸奥の真野の草原遠けども面影にして見ゆといふものを

〈三・三九六〉笠女郎

⑥相思はぬ人を思ふは大寺の餓鬼の後に額づくがごと

〈四・六〇八〉笠女郎

⑦来むと言ふも来ぬ時あるを来じと言ふを来むとは待たじ来じと言ふものを

〈四・五二七〉大伴坂上郎女